

# 姫騎士 クラフト ナイト!

A classmate is a princess knight!

1

小説  
EKNZ  
クラフトナイト

試し読み版



# Contents

## 第一章 俺と、姫騎士と、予言の姫

★1話★	魔隷術師な俺と、姫騎士な彼女	8
★2話★	戦いと、決着と	16
★3話★	隷属と、奪われる純潔	24
★4話★	お風呂と、パイズリ奴隷	39
★5話★	女冒険者たちと、食卓	52
★6話★	来訪者と、魔の誘い	61
★7話★	魔貴族少女と、魔の契り	73
★8話★	お仕置きと、新たな力	87
★9話★	闇の陰謀と、エルフ娘	100
★10話★	パーティの力と、男のロマン	112
★11話★	五人の魔隷と、俺との宴	120
★12話★	ふたつの食事と、ひとつの知らせ	136
★13話★	強襲作戦と、切り結ぶ剣	148
★14話★	女騎士と、その言葉	156
★15話★	碎かれる誇りと、その名	163
★16話★	予言の姫と、虹の刃	182
★17話★	姫の決意と、柔らかな天国	193
★18話★	三人のメイドと、入り交じる思い	211
★19話★	魔宮の公女と、破天の予言	225
★20話★	俺と姫と、繋がりの時	233
★21話★	管理者と、新たな道	246
★EX-Hシーン★	俺と、キリカと、制服と	256
★ボーナストラック★	パルミュールと、キリカと、お仕置きと 姫騎士がクラスメート! THE GAME	281 300

[キャラクター紹介]

# Character

A classmate is a princess knight! - volume.1

## 魔隸術師



トオル

*Tooru*

元の世界では空気のような地味な学生。転生後、他人を言いなりにできる職業・魔隸術師をゲット。

女法術師



ニーナ

*Nina*

小柄で細身の女法術師。ロリ担当。

女戦士



アメリア

*Ameria*

ワイルドな赤毛のロングヘアが特徴的な野性的な女戦士。姉御肌。

精霊弓士



シエラ

*Siera*

弓使いにして精霊術師のエルフ。そして巨乳。

# 姫騎士



**ナナ**  
*Nana*  
錬金術師によって造られた魔法生物。正式名称はアームマV7。



アーマーゴーレム



**パルミューラ**  
*Pallyura*  
第四位階に位置する魔貴族。漆黒のゴスロリドレスを纏う悪魔っ娘。



魔貴族

王女

ランバティア王国第三



**システイナ**  
*Sestina*  
キリカが仕えるお姫様。ランバティア王国の第三王女。



女騎士



**セレスタ**  
*Celesta*  
システイナ姫を守る女騎士。キリカをライバル視している。



**キリカ**  
*Kirika*  
トオルのクラスメートにしてクラス委員長。異世界でランバティア王国の姫騎士となる。

## 1 話…魔隸術師な俺と、姫騎士な彼女

「小田森くん、はいこれ。修学旅行用の冊子」

「あ……う、うん」

「それじゃ、半分よろしくね」

「ああ、わかったよ」

たったこれだけ。

それが俺、小田森トオルと、クラス委員の姫野桐華との間で交わされた会話のすべてだった。

俺の席が教室の最前列左端だったため、冊子を配る手伝いをする流れになった時の、ただそれだけの会話。

何のとりえもない地味な男子生徒と、成績優秀で人気も抜群な学園指折りの美少女。できる接点なんて、まあせいぜいそんなもんだ。

でも、まさか……「ただし、元の世界では」という註釈が、ここにつくことになるなんて。

※ ※ ※

俺にとって修学旅行は、他の学校行事と同じく陰鬱なイベントだった。

なにせ恋人はもちろん、友達の一人もいないのだから。

イジメられてるわけではないが、誰からも重要視されない、空気のような存在。

それが入学以来ずっと変わらない、クラスにおける俺の立ち位置だった。

そんなぼっちの俺が、そうじゃない幸せな連中を横目に観光だの散策だのを楽しめるはずもない。だから行きバスの中で一人、早くも最低のテンションで窓の外をぼんやり眺めていた時……その「事故」は起こった。

爆発音、強い衝撃、クラスメートや教師の悲鳴。

ホワイトアウトしていく視界。

そんな中俺は、ああ結局人生ひとつもいいことなかったけど、死ぬタイミングだけはみんなと平等だったな……などと、無感動なことを考えていた。

※ ※ ※

次に気が付いた時、俺はオフィスのような場所で安っぽい椅子に座っていた。

目の前にある机の向こうには、ねずみ色のスーツに眼鏡の神経質そうな男。

三十代くらい、東洋人にも西洋人のようにも見える。

なんだこれ、あの世にも面接とかあるの？

「……ええと、このたびは私どもの管理ミスで大変申し訳ないことをしました。もちろんすぐ補償いたしますので、ご安心を」

海外ドラマみたいに両手を大きさに広げて、作り笑いを浮かべるスーツ男。

……あの、さっぱり話が見えないんですが。

「ごもっとも。手短かに説明しましょう。まず、私は「管理者」。あなたがたの概念という神、その

端末のようなもの思っていたきたい」

はあ……それにしちゃずいぶんと神秘性のかけらもない場所と服装だなあ。

せめて背景デザイン、神殿とかにすりゃいいのに。

「次に、あれは『事故』だったとご理解ください。次元同士の部分衝突……まあ、数世紀に一度くらいは起こるんです。ええ、もちろん再発しないよう努力を……」

手短かに、と言ったくせに言い訳がましいセリフが無駄に混じっている。

神の領域もお役所仕事とは世も末だ。

ともあれ、『管理者』のおっさんの説明を、まとめると以下のようなになる。

1. 元の世界での俺たちは全員即死しており、それを覆すことはできない
2. その代わりに、俺たちの魂を別の世界に『転生』させてくれる
3. 転生先の世界は、いわゆる中世ファンタジーな魔法や魔物つき異世界である
4. 赤ん坊からではなく、元と同じくらい成長した姿への転生となる
5. どんな職業や立場に転生するかはランダムとなる
6. それからの人生はどうぞご自由に

「というわけで、一人ずつ説明がてら転生先を決めるクジを引いてもらってる、というわけです。さあどうぞ」

町内会の福引きみたいな、穴の空いたしよぼい箱を差し出された。

色々と適当だなあと思いつつ、仕方ないので手を突っ込んで一枚抜き出す。

なにに……魔隷術師<sup>スレイヴマンサー</sup>？

「え、マジですか？ そんなヤバイの混じってました？ 本当に？ おつかしいなあ……」

首をひねる。管理人<sup>〴〵</sup>。

おいおい、しつかりしてくれよ神様の端末とやら。

そもそも、スレイヴマンサーって何？ 職業？ 称号？

「ま、でも出ちゃったもんは仕方ないですね……。じゃ、今後は魔隷術師としてセカンドライフを頑張ってくださいな。それじゃ、次の人がつかえてるんでさよなら〜」

おい、ちよつと待ってまだ聞きたいことが……と止める間もなく。

俺の視界は、再びホワイトアウトした。

※ ※ ※

……その小さな辺境の村に、奇妙な異変が起きたのは春先のこと。

森に薬草採りに行った村娘を皮切りに、若い女ばかりが次々と行方不明になっていったのだ。

ゴブリンやオーク、あるいは野盗のしわざかと思われたが、何も痕跡や目撃報告がない。

搜索や山狩りもまるで成果がなく、調査依頼を請けた冒険者パーティさえも消息を絶った。

ここに至って、ついに王都に直接の救援が要請されることになる。

先の冒険者パーティがかなりの腕利きだったこともあり、事態を重く見た王都政府は、騎士団か

ら最精鋭を派遣することを決定した。

そして、真つ先に名乗りをあげたのは……。

※ ※ ※

「……第三トラップルームも、突破されたようです。ご主人様」

薄暗い灯りが照らす、洞窟最深部。

遠視魔法のかかった片眼鏡ごしに戦闘区域を観察していた、ロープ姿の女魔法術師が、うつろな瞳で俺に報告する。

俗に言うレイプ目ってやつだな……つと、そんなことを考えてる場合じゃあない。

俺は石造りの簡素な玉座の上で足を組み直し、彼女に……自分の「魔隷<sup>スレイヴ</sup>」に質問する。

「マジックミサイルとパラライズガスの複合トラップもあつさり単独突破、か。どう思う、侵入者はお前みたいな冒険者だと思うか？」

「いえ、おそらくは王都の騎士……それも単独での討伐戦闘や迷宮攻略に特化した、最精鋭かと」「へえ、そんなのいたんだ、この国。まあ、これだけ派手にやっつてりゃ騒ぎも大きくなるわな」

この辺境を騒がせている連続行方不明事件。

その主犯は何を隠そう、この世界に転生した俺だ。

洞窟にトラップまみれの拠点を築き、討伐に来た冒険者をこのように隷属させる。

すべては、俺が偶然引き当てた魔隷術師の力のなせるわざ。

詳しい内情は、後ほどあらためて説明するとして……今はとりあえず無礼な侵入者をどうするか

だな。

「このぶんだと、間もなくここに到達します。いかがしますかご主人様、我々が迎撃に出ますか？」  
「それで勝てると思うか？　もし、その最精鋭だとして」

「難しいでしょうね。敵の力は、我らパーティのそれを単独で上回ります。ですが、手傷は負わせられるかと」

捨て駒戦法をするか、否か。

もちろん、そう命じれば魔隷たちはためらいなく命を捨てるだろう。

少し考えて……俺は首を振る。

「いや、よそう。せつかくだ、ここで出迎えてやろうじゃないか。その騎士様とやらをね」

は、と従順に一礼する女術師に指示をして、俺はいくつかの準備を施す。

ちょうどそれが終わる頃……部屋の扉が、バンとけたたましく開いた。

「狼藉の日々もここまでです、邪悪な術師よ！　おとなしく抵抗をやめ降伏なさい、さもなければ——」

現れたのは、青いマントと黒い長髪をなびかせ、きらめく白銀の甲冑をまとった女騎士。

うっすら輝く幅広の騎士剣の切っ先を、まっすぐ俺に向けている。

「この姫騎士キリカの剣にかかって、果てることに——」

……え？

その声、その顔、その名前。

まさかそんなと、思わず立ち上がる俺。



同時に、向こうも気付く。

「ひ、姫野……さん？」

「小田森、くん!？」

……そう。

これが俺、小田森トオル改め魔隷術師トオルと。

姫野桐華改め、姫騎士キリカの。

新たな世界における最初の会話だった。

ステータス

【魔隷術師トオル】……………ジョブ…魔隷術師LV6

スキル…???

【姫騎士キリカ】……………ジョブ…姫騎士LV5

スキル…???

## 2話…戦いと、決着と

「そんな……まさかあなたが、連続行方不明事件の首謀者だったなんて……!!」

さすがに驚いた様子の姫野桐華、いや姫騎士キリカ。

隙なく構えられた騎士剣の切っ先が、動揺してわずかに揺れている。

だが、俺にとってもこの出会いは予想外だった。

思わず石椅子から立ち上がりかけた腰を、ゆっくりと下ろす。

「その驚きようじゃあ、元クラスメートと再会するのはこれが初めてみたいだね、そっちな」

「ええ……それもまさか、こんなにすぐなんて」

もしこの異世界が地球とそう変わらない広さだとして、バスに乗っていたのはたった20と数人。

それぞれの転生先がランダムなら、ひとつの大陸に数人程度の密度ってことになる。

魔法を除いて、移動手段も通信手段も中世レベルのこの世界だ。一生誰とも会わずに終わっても

おかしくない。

ましてや、俺たちが「転生」してからまだ一ヶ月程度なのだ。

「でも、それよりも驚いたのは……小田森くん、あなたがこんな悪事に手を染めてるってことよ」

彼女の声は、怒りではなく悲しみを帯びていた。

それが、俺をどうにも苛立たせた。

「へえ、優等生の姫野さんは異世界に来てまでお説教かい。しかもクラス委員の次は王都の騎士様になるとはね。そのいい子ちゃんっぷり、変わらないね」

「小田森くん、あなたは……変わったわ。そんな見下した目をする人じゃなかったのに」

「はあ？ 君が俺の何を知ってるっていうのさ」

ちゃんちゃらおかしくて、変な笑いが出てしまう。

そう、俺に目もくれなかつたくせに。

あの一言以外、話す機会もなかつたくせに。

「俺は変わっちゃいないよ。こつちに来て、やりたいことを自覚して、そのための力も手に入れただけさ」

「それが魔隷術師の力……人を精神操作で奴隷にする伝説の禁術だつていうの？」

まさかとは思ったけど、俺のジョブを知っている。

ということは、対策を立ててここに来てるってことか。

俺は考えを巡らせながら、時間稼ぎの会話を続ける。

「知ってるなら話が早い。健全な男子高校生がそんな力を手に入れたらどうするかくらい、マジメな姫野さんでも想像つくだろ？」

「そ、それは……！」

彼女が息を呑む音が聞こえた。

部屋の灯りは薄暗いからはつきりとは見えないが、赤面もしているに違いない。

「そう、今考えてる通りだよ。いや、姫野さんが知らないような、想像もつかないようなことも俺はしてるはずさ……捕まえてきた村娘や、冒険者の女にね」

「や、やめてっ！ どうして！」

どうしてそんなひどいことを、とでも糾弾するつもりか。

笑わせる。

「理解できやしないよ、生まれつき恵まれた姫野さんに俺の気持ちなんかね。それにこっちに来てからも……姫騎士、だっけ？ 当然のようにレアなジョブだ」

彼女の格好を上から下まで、じろじろと眺める。

体の要所をガードする軽装鎧をベースに、よく見るとレースやフリルで飾られたそのスタイル。

首元のリボンなんか、どちらかという制服か何かのようで、ご丁寧にミニスカートと白タイツの絶対領域まで確保されている。

地球の中世なら絶対にありえない、非現実的にもほどがある装束だ。

「しっかしオタク趣味とか無縁そうな姫野さんが、そんなコスプレみたいな格好するなんてね……だいたい姫なのか騎士なのかはつきりしてくれよ」

「そ、そんなことはどうでもいいでしょ！」

わざと軽口を叩いてみせながらも、俺は内心で舌打ちしていた。

ちよつとした動きの軽やかさから見ても、彼女の鎧は特殊なアーティファクト……魔法強化され

た武器であることは間違いない。

おそらくは、高い対魔法能力も備えているだろう。

それだけではない。

姫騎士というジョブの詳細は不明だが、ジョブ自体の魔法抵抗が高いこともほぼ間違いない。

洞窟の魔法トラップを傷ひとつなく突破してこれたのも、そもそも単独で術師を討伐に来たのも、そうじゃなければ説明がつかない。

……これは、実に厄介だ。

というのも魔隷術師の隷属魔法は、支配力も効果時間も強力な反面、魔法抵抗の高い対象にはよほど近距離から長時間かけ続けないと効力が薄い。

そしておそらく、彼女はそんな隙を与えてはくれないだろう。

「最後の警告よ。素直に降伏する気は、ないのね？」

「勝てる勝負を捨てるバカがどこにいるんだよ」

そう、じゃあ悪いけど……とつぶやいて、姫騎士が一瞬で間合いをつめてきた。

予想以上に速い踏み込みだ。

俺の反射神経そのものは、元の世界と大差ない。

普通なら、なすすべなく打ち倒されるしかなかっただろう……だが。

「っ!？」

ガインツと金属音が鳴って、騎士剣が大盾に食い止められた。

石椅子の陰に隠れていた女戦士が、俺をガードしたのだ。

それにしても、俺を殺さないよう剣の背部分で打ちかかるとはお優しいことで。

「魔隷……！」

うつろな瞳で俺を守る元冒険者を、驚いたように見つめるキリカ。

俺はその隙に、高速言語による詠唱を何節か完了させた。

ホログラフィのような緑の光が、円状にキリカの黒髪を取り巻き始める。

「くうっ!? あ、頭がくらくらするっ……！」

慌てて、バックジャンプして間合いをとる彼女。

魔隷女戦士はあらかじめ命令した通り、無言でガードの体勢を続けている。

「さすがに抵抗力高いね。進行度5%つてとこか。ま、打ち込むたびに上乘せされてくけどね」

相手を打ち倒す必要はない。隷属魔法をかける隙さえ作れば勝ちだからだ。

だからただ守りに徹する、それが俺の作戦だ。

盾の防御力も、女法術師によるエンチャント魔法で強化済みだ。

「考えたわね、小田森くん。いえ、魔隷術師……でも」

5mほど離れた間合いで、肩の高さまで持ち上げた騎士剣が水平に構えられた。

そんな遠さから一体なにを……？

「我が気高き剣に來たれ、破邪の靈光！ 聖光爆濤破ッ!!」

真紅の魔力が刀身に集束し……そして奔流となつて放たれた。

閃光が部屋を照らし、炎の元素魔法よりも強烈な衝撃がはじける。

かざした盾ごと、魔隷女戦士が壁まで吹き飛ばされて動かなくなった。

「驚いたな……こりやすごい魔法剣技だ。それが姫騎士のスキルってわけか」

「そうよ。そしてこの技は悪しき者、心なき者に特効の破壊力を示す。あなたの魔隷にも効果てきめんのようなね」

守り手のいなくなった俺めがけ、腰を落として剣を構え直すキリカ。  
魔法の射程外から一気に踏み込み、一撃で昏倒させるつもりだろう。

「もう盾はないわ。残念だけど、これでお仕舞いよ」

「ああ、どうやらそうみたいだ」

彼女が踏み込む。

同時に俺が指を鳴らす。

部屋奥の扉から現れた女法師が、高速詠唱を開始する。

それに気付きつつも、キリカの動きは変わらない。

どうせ自分に魔法はほぼ効かないし、俺を倒せば決着するのだから当然だ。

だが……それこそ俺の目論見通りだった。

「……えっ!!」

振り抜かれた騎士剣は、俺の体をむなしく突き抜けた。

「これは、ミラーイメージ!!」

「ご名答」

実際の俺の位置は、一步半ぶん斜め後ろ。

魔法抵抗が高くとも『他者にかけられた魔法』を看破できるわけではない。

この仕掛けを見破られないため、魔隷にも最初から、ニセの俺を守らせていた。

そして、鏡像の俺が立っていた場所、彼女が踏み込んだ場所には……。

「うそ、落とし穴っ……!?!」

姫騎士さまの体が、まぬけにも1・5m四方ほどの縦穴に滑り落ちていく。

この洞窟を拠点にした時から準備しておいた、きわめて原始的な仕掛け。

だが、それゆえに魔法トラップと違い、魔力による感知も魔法抵抗も関係ない。

もちろん、それだけなら彼女は優れた身体能力ですぐ脱出するだろう。

だから、女法術師の魔隷に詠唱させた魔法の出番だ。

ガチャン、と3cmほどの隙間しかない鉄格子が、キリカの頭上を塞いだ。

テレポートオブジェクト……物体短距離転送魔法によって、一瞬で受け穴にはめこんだのだ。

「そんな……こんな手につ……!」

「さすがに手こずらせてくれたね、姫騎士さまは。でも、ろくに構えもとれないその狭さならさっきの剣技も使えないよね？」

鉄格子を破って脱出するのにかかる時間は、どんなに急いでも数分はかかるだろう。

その間に俺は、悠々と近付いて詠唱を完了させればいい。

彼女を……姫騎士キリカを、元クラスメートの姫野桐華を、隷属させる術式を。

ステータス

【魔隷術師トオル】……………ジョブ…魔隷術師LV6

スキル…隷属魔法LV5

【姫騎士キリカ】……………ジョブ…姫騎士LV5

スキル…聖騎剣技LV3／魔法抵抗LV2

### 3 話…隷属と、奪われる純潔

「思ってもみななかったよ。まさか、隷属しても意識を保ってるなんてね。…魔法抵抗が一定以上だとこうなるのかな？」

洞窟奥、俺の私室。

ベッドに腰かけ、俺は目の前にひざまずいた姫騎士キリカを興味深く見つめる。

彼女は、俺の隷属魔法にかかった。それは間違いない。

無抵抗にここに来て、俺の指示に従っているのだから。

だが、これまでかけた相手は皆、人形のような受け答えをするだけの存在と化したのに対して、彼女だけは性格も意識もそのままだったのだ。

「っ……………」

長いまつげの目を伏せて、キリカは黙ってじっと耐えている。

体が思うように動かせない屈辱に、これから自分が何をされるかの悪寒に。

「ま、いいや。今からどうなるかくらい想像つくよね、マジメな姫野さんでもさ」

「小田森くん、あなたは…きゃっ!!」

ぼろん、と目の前に取り出したチンポを突きつけると、驚いて目をそむけるキリカ。

その新鮮な反応がたまらない。ムクムクと勃起してしまう。

なにせ、これまで犯してきた村娘や冒険者たちは、従順すぎてまるでダッチワイフだったからな。  
「や、やめて！ そんなヘンなものを近付けないでっ！」

「ヘンなものとは失礼だなあ。ほら、ちゃんと見てごらんよ、姫野さん」

命令のニュアンスが入った言葉に反応し、彼女の顔が向きを変えていく。

赤面した可愛らしい顔が、嫌そうな表情のまま、まじまじと俺のチンポを見つめる。

「姫野さんは、そういうえはキスはまだしたことないのかな？」

「う、うう……し、したことない、です」

俺の質問に、魔隷となった彼女は正直に答えるしかない。

「そっか、なら姫野さんのファーストキスは……俺のチンポに捧げてもらおうかな」

「え、そっそんな!? やつ、あつ嫌っ……んんうっ!？」

自分の意志に反して、可愛い薄桃色の唇がギンギンになった亀頭に近付き、触れた。

柔らかい、少し湿った感触。

あの姫野桐華が、学年トップの美少女が、姫騎士の装束で俺のチンポに初キスを捧げている！

それだけで射精してしまいそうな達成感だ。

「う、ううっ……へ、ヘンな味がっ……!! 匂いも臭いっ……!!」

「初キスおめでどう姫野さん。じゃあそのまま、俺のチンポをフェラチオしてよ。フェラくらい知

ってるよね？」

魔隷自身の知らない概念を命令しても、正確に実行させることはできない。

涙目の姫騎士キリカは、おそろおそろピンクの舌を伸ばして、俺の膨らんだ亀頭をべろべろと舐め始めた。

「ははっ、ウブな姫野さんでもフェラが何かくらい知ってたか。でも、こういうことするのは初めてだよね？ 男と付き合ったこともないよね？」

「は、初めて、です……はい、手を握ったこともありません……」

「だと思っただけど、安心したよ。じゃ、俺が初めての男ってわけだ」

「っ……！ さ、最低の男だわ、あなたはっ……！」

「その通り。いいねえ、にらまれながらしゃぶられると余計燃えるよ」

俺をキツとにらみ付けながら、ぎこちなく先端をワンパターンに舐め続けるだけのフェラ。

ま、ウブな処女の知識じゃその程度が限界か。

元クラスメイトに、クラスのアイドルにさせてるっただけで達成感は抜群だけど、いつまでもこのままじゃ面白くない。

「おい、ニーナ。ちよつと来てくれ」

「はい、ご主人様」

ロープ姿の女法師師が入室し、俺のそばにやってくる。

ひざまずいてチンポを舐めさせられている姿を、魔隷とはいえ他人に見られたことで、キリカがビクッと反応する。

「下手クソなフェラしかできない姫騎士さまに、俺がお前に仕込んでやったテクを教えてやってく

れよ。横でこいつを使ってみせてさ」

「わかりました」

ベッド脇に置かれたデイルドーを、キリカの隣に正座した彼女に渡す。

ニーナがローブの頭巾をとると、金髪セミロングの、少し地味だが整った顔が現れる。

年格好は俺たちとそう変わらない。

そのまま彼女は、捧げ持つようにしたデイルドーにねっとり舌を絡め始めた。

「うわ……す、すごい……!!」

にゅちゃぺちゃと水音を立てて、いやらしい舌と唇の動きで偽物のチンポをしゃぶり始める姿を見て、キリカがかぼそい声で驚く。

彼女を魔隷にしてから、時間をかけて少しずつ教え込んだフェラテクだ。

「さ、真似して同じようにしてもらおうかな。できるだけ忠実に、ね」

「え!! あつ、うそ嫌っ……んちゅっ、んぶぶうっ!!」

命令に従わされたキリカが、ニーナを横目で見ながら同じ動きを始めた。

いくら恥ずかしくても、忠実にマネしろという指示に逆らうことはできない。

とたんに下品に舌を伸ばし、唇を前後に動かして、よだれを垂らしながら俺のチンポをしゃぶり

だす元クラス委員。

「う、お……!! すごいよ姫野さん、さすが飲み込みが早い……くっ!」

「やつ、わたし、こんなことしたくなっ……んぶぶう!!!」

ニーナが喉の奥まで、ずぶずぶとデイルドーを呑み込み始めた。

同じようにさせられたキリカの柔らかい粘膜が、俺のチンポをにゅっぽりディープに包む。

「くううっ！ いいぞ、そのまま大きく前後にしゃぶれ、姫野さん！」

「んぶ、んじゅぶっ、じゅずぶぶっ!! ふぁ、嫌っんぁぁ！ はぶぶっ!!」

いい匂いのする黒髪を振り乱し、銀の騎士鎧をかちやかちや鳴らしながら、俺にひざまずいて激しくフェラ奉仕する、姫騎士にしてクラスメートの処女美少女。

たまらない征服感と気持ちよさに、たまらず俺のチンポは限界を迎えた。

「いくよっ、出すぞっ！ 口の中に俺の精液っ、受け止めて溜め込めキリカ！」

どくん！ と白い奔流がはじける。

んーっ、んーっとうめく彼女の口内に、びゆるびゆると大量の精液を注ぎ込む。

「うっ、くっ……!! ぜ、全部吸い取ったら、口を開いてみせるんだ……」

「あ、あうう……!!」

ゆっくりチンポから離れた小さな唇が、命令通りに開かれた。

唾液と混じった白濁液だまりが、むあつと湯気をたてている。

「よし……それをゆっくり呑み込め」

「っ……!! んっ……!!」

ごくんっ、と白い喉が鳴って、俺の排泄した精液が姫野桐華の体内におさまっていく。

一ヶ月前には、非現実的すぎて想像すらできなかった眺めだ。

「はあ、はあ……けほっ……！ こ、これで満足なの……？」

荒い息を吐きながら、そんなお決まりのセリフを吐く彼女。

俺は当然、にやりと笑って首を振った。

「ニーナ、いつものアレをチンポに頼む」

「はい、ご主人様」

ディルドーをようやく口から離し、女術師が術式を詠唱する。

紫色の光が萎えたチンポを取り巻き……するとすぐに、それがムクムクとフル勃起状態に戻っていく。

「う、うそ……い、一回出したら終わりじゃないの!？」

「フィジカル強化系エンチャント魔法のちよつとした応用だよ。冒険者はこういう使い方結構してるらしいぜ？ 勉強不足だね、姫騎士さま」

青ざめる彼女を笑い、俺は次の指示を出す。

「さあ、本番といこうじゃないか姫野さん。いや、姫騎士キリカ」

※ ※ ※

「くっ……み、見ないでええ……！ お願いつ……」

「いいねえ、綺麗だ。最高の眺めだよ」

ベッドに悠々と寝転んだ裸の俺。

キリカはというと、甲冑姿のままショーツだけを外しスカートを自分でめくりあげ、俺の腹あた

りにまたがるようにひざ立ちになって女性器を突き出すという恥知らずな格好だ。

『オマ○コを広げてよく見せろ』という命令を、実行させられているのだ。

「毛が薄いんだね、姫野さんは。マ○コもその周りの肉も、シミひとつなくて本当に綺麗だよ」

「やあつ、は、恥ずかしいよお……!!」

狭そうな未使用穴が精一杯広げられ、サーモンピンクのヒダがひくひく震えている。

奥には、フリルのような処女膜がうっすらと確認できる。

「じゃあいよいよ、俺のチンポに自分からまたがって処女を捨ててもらおうかな」

「そ、そんなっ……じ、自分でするなんて、うそっ……!!」

どんなに嫌がろうと、魔隷への命令は絶対だ。

天井めがけてそそり立った俺のチンポ、その真上に処女マ○コを移動させ、ぴとりとあてがうキリカ。

ちなみに姫騎士というジョブは、強さと気高さ、美しさを併せ持った最精鋭の女騎士にのみ贈られる称号らしい。

そんな姫騎士の誇りも、元クラス委員の真面目な美少女の尊厳も、まとめて打ち砕くための騎乗位セックス指令というわけだ。

「おっと、その前に……ハメやすいように、濡らしてもらおうかな」

「え……あつ、な、何これっ?! 何をしたのっ?!」

ぶるると震えたキリカの、亀頭に密着した割れ目からとろりと愛液があふれた。



魔隷術師の命令は、新陳代謝などの肉体的現象にもある程度およぶ。

「初めてのセックスが痛くないように、俺の優しい心遣いつてわけさ」

「く、こ、こんなこと……どのみち最低よ、あなたと無理矢理なんて！」

「いいねえ、チンポ突っ込まれてもその抵抗心を失わないでみせてくれよ、姫騎士さま。それじゃあ……俺のチンポを自分でくわえ込め、キリカ！」

「いっ……嫌あああああつ!!!」

腰を落としてずぶずぶと、好きでもない男の、俺のチンポを自分から迎え入れていく姫野キリカ。強制的にたつぷり濡れていても、キツイ締め付けがチンポを覆い、そして……。

「いっ……痛つ、痛ああ……いっ……!!!」

「はははっ！ 姫野さんの処女を、姫騎士キリカのバージンを、俺が！ 俺が今破つてやったぜ！ はははははっつ!!」

頭がしびれるような征服感と達成感。

ぷちぷちと若い膜を破つて、俺のチンポが姫騎士マ○コを貫き奥まで侵入していく。

村娘や女冒険者たちの処女を奪った時も、その時は感動的な気分だったが、今のこれとは比較にならない。

「さて、せっかくだからギャラリーを呼んであげないとな。ニーナ、アメリカ！」

俺の呼び声に答えて、女法術師と、先の戦いでガード役を担当していた女戦士がベッドの左右に並ぶ。

鎧を脱いだ女戦士アメリカは、日焼けした健康的な肌とワイルドな赤毛のロングヘアが特徴的な野性的美女だ。

年齢は俺たちやニーナより2、3歳上だろうか。

「やだっ、やああだあ……っ！ み、みない、でえっ……！ んああっ!!」

処女を喪失し、初めてのセックスなのに男の上で鎧着衣のまま腰を振るといはいしたない格好を。つうつと一筋垂れた破瓜はかの血を。

すべてをまじまじと二人に、魔隷とはいえ同じ女に見つめられる。

その強い羞恥心に、真っ赤になって涙を流しつつも腰を止められないキリカ。

「ははっ、見られ始めると余計に締め付けがキツくなつたよ？ ひよつとして見られると感じるマゾだったのかな、元クラス委員の姫野さんは？」

「そ、そんな、ことっ……わ、わからない、わかりませんっ……!!」

質問の形だったためか、正直にわからないと答えてしまっているのが滑稽だ。

俺はその様子に、泣き顔に、なおさら興奮して自分からも腰を突き上げる。

「ひっ、ひぐうう!! やっあっあっ!! う、動かさなっ……んあああっ!!」

「だんだん気持ちよさそうな声が出るね。ほーら、俺の動きに合わせて腰を上下させながらグラインドしてごらん」

「やあっ、そ、そんなのできなっ……ひっ、あひいっつ!!」

本来なら羞恥心でためらうような状態でも、命令は絶対だ。

はしたないほどに大きく、深く、腰をくねらせてチンポをマ○コでしゃぶる姫騎士。

カチャツ、チャリツと鎧がこすれあう金属音を立て、可憐なフリルやスカート、長い黒髪が動きと共に揺れる。

「くっ……！　すごく熱くなってウネって、俺のチンポを締め付けてくるよ、キリカの姫騎士マ○コは！」

「やだやだあつ、わたしっそんなのしていない……おふうっ!?　あふ、ひゃあああ、んあああ……あつ!」

乳房の形をそのまま象ったような、地球ではありえない奇妙な胸アーマーが大きく揺れる。

そういえば姫野桐華は着痩せする隠れ巨乳だという噂が、クラスの男子にささやかれていた。

その真偽は、後でたつぷりと確かめてやるとしよう。

「処女とは思えないチンポの締め方だよっ、セックスでも優等生だね姫野さんは……！　ところで、さっきの濡れろって命令で想像つくかもしれないけど……!」

「ひぐうっ、えっ何っ、えっ!」

「俺が命令したら、君はなすすべなくイクんだ、絶頂するんだよ。どうだい、最初のセックスで射精と同時にイカされるなんてなかなかできない体験だと思わない？」

「つつ!!!　な、何それっ、い、嫌ああっ！　イキたくなかつ、イキたくなかつ……!」  
泣いても嫌がつても、もう遅い。

それでも腰をがくがく上下させる姫騎士を、俺はガンガン突き上げながら。

ついにこみあげてくる射精感に合わせて、その命令を放った。

「さあイケっ、姫野桐華あつ!! 俺の射精に、子宮への生出しに合わせて思いつきお前はイクんだっ、姫騎士キリカ!! イク時は宣言しながらなあつ!!」

「いつ嫌ああつ、ダメええええつ!! やだやだダメ駄目だめえええつ、ひつ……!!」

ひとときわ深いストロークで、キリカの腰が落とされ、俺のチンポが突き上げられ。

こりこりした子宮口と俺の亀頭先端が、がっつりとキスをした瞬間。

「ひつ……んあはああああつ!! イッ、イクううううつ!! いったいく、イキます、イキましゅうううううつ!!」

どくつ……どくんつ、びゆるるう……!!

鎧とシルクの下衣に包まれた、姫騎士のもつとも大事な場所に。

脈打つ音を立てて、俺の子種が破裂せんばかりの勢いで流し込まれていく。

「うっ……くっ、おあつ……!!」

「ああっ、んあああつ……はあ、あああつ……! な、何これえ……こ、こんなの知らない……!」  
ニーナとアメリカ、魔隷二人の従順な瞳にじっと見つめられながら。

くたつと俺の胸板に倒れ込んだキリカが、おそろく人生初のアクメの余韻に黒髪を震わせた。

俺のザーメンをたっぷりと、子宮に浴びながら……。

※ ※ ※

「……小田森くん。わたしは、あなたを許さない」

ベッドに倒れたキリカは、綺麗な瞳から発した鋭い視線を俺に向け。

処女喪失と初絶頂、初中出しのショックと疲労で、まだ息を乱れさせながらそう言った。

俺はその言葉に、ぞくりと背筋が震えた。

恐怖のせいじゃない。

それは初めて彼女から自分に向けられた、強い意志の表れだったからだ。

彼女もおそらく、そんな強烈な感情を他人に向けるのは初めてだろう。

俺が……俺だけが、あの姫野桐華とそういう関係になったんだ。

ある意味、処女を破った時以上の達成感を俺は感じていた。

「それでこそだよ、姫騎士キリカ。やれるものならやってみてくれ」

「ええ、今はその方法もわからないけど、必ず……必ずやってやるわ。私を魔隷としてそばに置くなら、覚悟することね」

俺に危害を加えることや、命令なく俺から一定以上離れたり、自分の命を捨てるような行為。

それらは命令するまでもなく、魔隷の『基本禁止原則』として隷属術式に組み込まれている。

そして、魔隷となった者への支配は、半永続的に解けない。

厳密にはもっと細かいルールがあるのだが、それはまた今度説明しよう。

ともあれ、それを覆してみせるというなら見物だ。

「楽しみにしてるよ。それはそうと、だ」

俺はベッドの上で手のひらを握ったり、開いたりを繰り返した。

「よし、やっぱりか。ありがとう、礼を言うよ姫騎士さん」

「どういう、こと……？」

体の奥底からわき上がってくるような感覚がある。

これまでに何度か味わったものだ。

「ジョブの練度……レベルを上げる条件は知ってるだろ？ 対応するスキルを使つて経験を積み、スキルレベルを上げること……それもただやみくもにじゃダメだ」

剣技なら、実戦の中で強敵と切り結ぶことで得られる経験量は、単なる素振りの訓練とは比較にならない。

魔法なら、より複雑な術式を使つたり、より抵抗力の高い相手への使用を成功させたりすることが重要だ。

「俺の隷属魔法も、高い魔法抵抗の相手に向け、そして命令を実行させるほどに経験値がハイスピードで溜まっていく。それが複雑で珍しい命令ならなおさらだ」

「っ!? ま、まさかそれって……！」

「そう。姫騎士さまにさっきしたいやらしい命令の数々は、予想以上の経験値を与えてくれたよ」  
思わず笑いがこみあげてくる。

最強の持ち駒と、効率的なレベルアップ手段、そのふたつが一気に転がり込んできたことになる。

しかも……元クラスメートの美少女で、現在はレアジョブの姫騎士という、最高に陵辱しがいるある性奴隷として。

「そ、そんなことって……!」

「この出会いに感謝だね。じゃあ姫野さん、いや姫騎士キリカ。まだまだ魔法で勃<sup>た</sup>たせられるし、今日は一晩中経験値稼ぎに付き合ってもらおうかな」

「い、嫌あつ……」

「試してみたい命令もプレイも、いくらでもあるからね。飽きさせないことは保証するよ」  
もう、いやあああつ——と響き渡る、姫騎士の悲鳴。

次の夜明けを迎える頃、俺は。

首尾よく隷属魔法と、魔隷術師のレベルを上げること成功していた。

ステータス

【魔隷術師トオル】……………(レベルUP!)

ジョブ…魔隷術師LV6↓7

スキル…隷属魔法LV5↓6

【姫騎士キリカ】……………ジョブ…姫騎士LV5

スキル…聖騎剣技LV3／魔法抵抗LV2

#### 4話…お風呂と、パイズリ奴隷

「いや、運動した後には浴びる風呂は格別だね。そう思わない？」

湯気のたちこめる岩風呂で、顔にばしやりと白っぽいお湯をかける俺。

洞窟の最深部、湧き出た天然温泉を利用した快適な風呂場。

ここを拠点にできたのは、実にラッキーだった。

「何が運動よ……。体を洗わせてくれたことだけにだけは、一応感謝しておくわ」

キリカはといえば、少し離れた場所に肩まで浸かり、俺をジト目でにらんでいる。

一晩中のセックスでついた汚れは、すっかり洗い落とされていた。

もちろん、胎内に注ぎ込まれたぶんを除いてだが。

「魔隷の生活環境には、ご主人様として気を遣ってるつもりだよ」

「それはどうも……。つて、こつちを露骨に見ないでよね。言っても無駄だろうけど」

鎧を脱ぐと姫騎士要素が消え、グクラスメートの姫野さんの裸が意識される。

真っ白で健康的な裸体と、湯に浸からないようまとめて肩に乗せられた黒髪とのコントラストが

綺麗だ。

無駄な肉はないけど柔らかかそうな女性的ライン、なかなかこそそる。

「今さら恥ずかしがるどころ？　ぶっ倒れて眠るまで、昨日あんなにくんずほぐれつ……」

「だ、だからそんな話はやめてっつて！」

たつぷり経験値を稼ぐためあんなにヤリまくったのに、いちいち恥ずかしがる反応が可愛い。胸を必死に腕で隠しているが、予想通りその膨らみはなかなかのポリウムだ。

Eカップくらいは余裕であるんじゃないか？

命令して手をどけさせるのは簡単だが、恥じらう姿も捨てがたいので今はこのままだ。

「さて、話を戻そう。システイナ姫……それが、君を召し抱えた主君ってわけだ」

もちろん、ただ一緒に浸かっていたわけじゃない。

俺はキリカを情報源に、この国……ランパディア王国の内情を聞いていた。

そこで出てきた名が、第三王女システイナ・ランパディア。

彼女が仕える若き王族の名だ。

キリカは転生してきてすぐ、お忍びで郊外を散策していたシステイナ姫が、運悪くモンスターに襲われているところに出くわしたのだという。

そして窮地を救い実力を示し、姫の恩人として、側近として迎えられたらしい。

「すごい出世コースだねえ。システイナ姫ってどんな人？」

「彼女は……とてもお優しく、しっかりした頭のいい方よ。年が同じこともあって、私とは友達のように接して下さったわ」

「ふむふむ。それで、美人？」

にやにやしなげながら聞くと、露骨にいやな顔をするキリカ。

おいおい、そこは非常に大事なことじゃないか。

「……とても綺麗な方よ。プラチナブロードと蒼い瞳の、絵に描いたようなお姫様……ランバディアの至宝、とまで呼ばれてるわ」

「へえ、そんなプリンセスに仕える姫騎士か。さぞかし絵になっただろうなあ」

ま、今は俺がご主人様なんだけども。

しかし、ランバディアの至宝か……そこまで言われると興味が湧いてくる。

「よし、決めた。そのシスティナ姫を、俺の魔隷にしよう」

「なっ……!!」

さすがに絶句するキリカ。

あ、一瞬隠す腕がずれて乳首が見えそうになったぞ。

「しょ、正気とは思えないわ。いくらあなたの力でも、そんな無謀なこと……成功しても失敗しても、国を敵に回すことになるのよ!!」

「どうしてそう思う？ 王族だろうと護衛だろうと、あつさり国中の要人を魔隷にして王国を乗っ取っちゃうかもしれないぜ？」

挑発するように言うと、キリカは少し思案顔をして、慎重に口を開いた。

「いいえ……あなたの力でも、限界があるはず。たとえば一度に魔隷にしておける人数がそう多くないことは、あなたの活動や戦力を見れば予想がつくわ」

「へえ……」

なかなか頭が回るじゃないかと、少し感心する俺。

そう、いくらチートジョブの魔隷術師といえども、無制限に魔隷を増やせるわけじゃない。

同時に隷属させておける人数は、隷属魔法のスキルレベルに等しい。

つまり、今の俺なら最大六人ということだ。

もしかしたら一定レベルを超えると急激に増えるかもしれないが、まだその様子はない。

そもそも限界まで魔隷を作っていれば、誰かの術式を解除して解放してからでないと、新しい魔隷を隷属させることはできない。

これには多少の時間がかかるのが玉にキズだ。

だから、俺は可能な限り「空き枠」を一人分は作るようにしている。

キリカと戦った時（スキルレベル5の時）、俺の魔隷は女法術師ニーナ、女戦士アメリア、そしてあと二人の冒険者たち（別の命令を与えているため、今ここにはいない）。

能力のテストがてら魔隷にしていた村娘たちは、今はみな術式を解除されて洞窟内の隠し部屋に監禁してある。

数が限られてる以上、魔隷は一体一体の質が重要。

だからこそ、姫騎士キリカという予想外のエースをゲットできたのは幸運だった。

「あなたの総戦力自体はたいした規模じゃない。それに、王宮には高い魔法抵抗を持つ騎士や護衛、魔法をかけられた状態にある者を見破れる術師もたくさんいるわ」

「君を利用して侵入しようとしても、一筋縄じゃいかないってことか」

「そうよ。大それた野望は抱かない方が身のためね」

「へえ、俺のこと心配してくれてる？」

「だ、誰がっ……！ 私が心配してるのは、システイナ姫さまの方よ！」

彼女をからかいつつも、俺は思案する。

確かに、ちよつと慎重に計画を練る必要はあるな。

「ま、いいや。ああそうそう、姫野さん。言つとくけど、俺に善悪や損得を説いてもムダだよ」

「え……？」

困惑顔の彼女。

俺は濡れた髪に手櫛を入れながら、言葉が続ける。

「俺はね、こっちに來て決めたんだ。第二の人生は、好きなように生きてやるって」

「それが、女の人たちを次々言いなりにすることなの!!」

「ゲスだと思ふならそれでいいさ、俺自身そう思うし。でも、元の世界の俺には、何もなかった…

…力も、きつかけも、やりたいことひとつなかったんだよ」

バス事故で死んだと思つた時さえ、しょっぱい達成感しか俺の中にはなかった。

もう、あんな人生はごめんだ。

何も満足感を得られないまま生きて死んで、後悔するのはたくさんだ。

「だから、今度は欲望のままに生きるって決めたのさ。そしてそのためならどんな困難も排除して

みせる。いや、従えてみせる。君にそうしたようにね」

姫騎士を手駒に、お姫様を墮とす。

それはちようどうつてつけの燃える目標だ。

男として、オスとして、これほどやりがいのある挑戦も少ないだろう。

「小田森くん、あなたは……!」

キリカはそんな俺を、さまざまな感情が混じった複雑な表情で見つめていた。

※ ※ ※

湯船を出て、すべすべの岩盤に寝転んだ俺。

命令によつて後に続いたキリカが、これから起こることに警戒の表情を見せている。

「汚れは落ちたけど、せつかくだからあらためて二人で、楽しい洗い方<sup>を</sup>をしようと思つてね。まず、君の体の前面に石鹼をまぶしてもらおうか」

「え、や……やだつ、何の準備っ!」

どんな命令だろうと、魔隷が逆らうことは不可能。

ぷるん、と露<sup>あち</sup>わになつた形のよく柔らかかそうなおっぱいに、なだらかなお腹のラインに……自分の手で石鹼の泡を塗りたくつていくキリカ。

「君自身が洗う道具になるんだ。ほら、そのまま俺に覆い被さるように密着してごらん」

「ええっ!! そ、そんなの絶対おかしいっ……きゃ、んっ……!!」

むにゅり、とふたつの柔らかい膨らみが胸板に押し当てられ変形する感触。

引き締まった、でも適度に脂肪のついた太股が、二の腕が。

彼女の柔らかい部分がいくつも、俺の素肌に泡まみれで密着する。

「おお、これはなかなかっ……！ そのまま全身をそう、こすりつけるようにするんだ……おおう!!」

「や、あつあんっ!! こ、これっ滑り落ちそうにっ……やあああっ!!」

「ぎこちなく体を前後させ、みずみずしい体そのものを肉スポンジにして俺を磨いていくキリカ。ニユルニユルと泡で滑る裸体が、細かく滑り続けて心地いい。」

「まさか、あの姫野さんがソープの風俗嬢みたいに俺に洗い奉仕してくれるなんてね……感動だよ」  
「な、なにそれっ、そんなの知らなっ……あうう、こ、こすれてっ……!!」

縦横無尽に形を変えて飽きさせない巨乳に、時々硬めの触感が混じってきた。

白い泡の中に、可愛い薄ピンクの突起が見え隠れしている。

「あれ、姫野さん、ひよっとして乳首勃起してる?」

「え!! そ、そんなことっ……は、はい、勃起して、ます……っ!」

主人の「質問」に嘘をつくことは許されない。

生理現象とはいえ、はしたなく尖った乳首を男の体にこすりつける行為の羞恥が、彼女の顔を余計に染める。

「別に恥ずかしいことじゃないさ。俺のも、こんなになってるし」

「う、ううっ……さ、さつきから当たってるから言わなくてもわかるわよお……」

学校トップクラスの美少女にソーププレイされて、勃起しない男がいるはずもない。

泡まみれでそそり立つ俺のチンポは、彼女の柔らかな内股や下腹部と触れ合うたびに硬さと熱さを増していた。

「ちようどいい、次はここを重点的に洗ってもらおうか。ただし……そのおっぱいで、だ」

「え、ええっ!!」

身を起こし、岩盤に腰かけた両脚の間に、彼女の上半身が移動する。

そのまま、大ポリウムでせり出した肉の双球が……むにゅうううっ! と俺の熱い肉棒を挟み込んだ。

「つく、おお……こ、これは予想以上につ……!!」

「や、あつ熱うっ……!! お、おっぱいでこんなことお……っ!!」

元クラスメートの巨乳姫騎士による、初めての泡まみれバイズリ。

ふにゆふにゆの巨大なマシユマロのような、お湯の詰まったシルクの水風船のような。

なんともいえない心地よさが、優しく俺のフル勃起チンポを包み込む。

「すごいな、完全に俺のが挟めるじゃないか。おっぱいのサイズ、いくつ？」

「う……き、きゅうじゅうっ……90のEカップ、です……っ!」

魔隷への強制力が、恥ずかしい告白を引き出す。

隠れ巨乳だつて評判だつたけど、まさかそこまでだったなんて嬉しい誤算だよ。

「あうう……さ、最悪う……!! は、恥ずかしいよおお」

「さあ、そのまま谷間からチンポを逃がさないように、そのEカップおっぱいでしごき洗いだ」

いい匂いのする濡れた黒髪を、指先でもてあそびながらの指示。

ぬぷっ、ぱぷっ、にゆるるんっ……とエッチな音を鳴らし、キリカがパイズリ奉仕を強制される。「こ、こんなことさせて何が楽しいのか全然わかんないっ……!」

「男心がわかってないな、姫騎士クラス委員さんは。学校でも宮廷でも、男どもは君のおっぱいをそういう目で見てたと思うぜ」

「う、嘘よっ! そんな変態みたいなこと考えてるのっ、あなたただだわっ……あうう!」  
憧れの美少女の、高嶺の姫騎士の谷間が、今初めて俺だけに捧げられている。

独占する征服感にチンポはますますいきり立ち、真っ赤に膨らんだ亀頭がキリカの眼前に何度もグイグイ迫って、彼女を怯えさせる。

「うう……こ、これ、熱くてガチガチでっ、人間の体じゃないみたいで気持ち悪い……!」  
「気に入ってもらえて嬉しいよ。ああ、そうそう……ひとつ教えところか。魔隷の、持続時間のことを」

唐突に変わった話題に、怪訝そうな顔でパイズリしつつ耳を傾けるキリカ。  
俺の支配をなんとか脱しようとする彼女には、聞き逃せない情報だ。

「それは、隷属させられてる者の魔法抵抗の強さに反比例する。魔法抵抗を持たない凡人なら、俺が解除しない限り半永久的に続くけど……君みたいな抵抗スキル持ちはそうじゃない」

それを聞いて、キリカの表情に希望がさした。

相変わらず胸でチンポをしごきながらってギャップが、妙に興奮するけど。

「……いいの？ そんなことを私にバラしてしまっても」

「構わないさ、この程度。もちろん術式をかけ直せばリセットされるし、具体的なスパンを教えるつもりもないからね」

「それでも……十分な収穫よ。あなたが何らかの理由でかけ直せない状況に陥ったりしたら、この隷属が解けるチャンスがあるってことだわ。私は決してあきらめない……システイナ姫さまにも、手を出させはしない……ッ！」

ああ、やはり、彼女は面白い。

魔隷という絶望的な支配を受け、辱められてもなお、希望を捨てず俺に立ち向かおうとしている。姫騎士の称号は伊達じゃないってわけだ。

そして、そんな彼女だからこそ、いつか心から屈服させてやるという決意がふつふつとたぎってくる。

「それでこそ姫騎士キリカ。じゃあ、さっそく……っかけ直すっとしようか」  
にやりと笑う俺に、この状況で魔法を？ といぶかしむキリカ。

「詠唱以外にも、魔法の媒体にはさまざまなものがある。たとえばそう、体液だ。血液なんかが代表的だけど、隷属の術式には他にもうっつけのものがある」

「え……ま、まさか……!!？」

「文字通り、っかけ直すっつてね。いくら姫野さんでも、意味わかるよねっ……!!」

天国のような肉球凶器で快感を高められたチンポは、もう爆発寸前。

意味を悟った姫騎士の怯え顔めがけ、カウパーを漏らした先端がぶるぶる小刻みに震えている。

「ま、まさかアレを私の、かつ顔にっ!! や、やだ嘘おっ!!」

「逃げちゃダメだぞ、こつてりブチまけてやるからなっ……さあラストスパートだつ、思いつきりおっぱいで押し潰すみたいにしろっ! 俺も、ほらこうしてっ!」

「や、やあつ、あううっ!? えっ、ちっ乳首だめええっつ!!!」

不意打ちで俺に乳首を両方つままれ、可愛い声で鳴くキリカ。

すっかり勃起したコリコリする突起をもてあそばされても、彼女はされるがままで。

憎い俺のチンポに熱烈なおっぱい奉仕を続ける動作を、止めようにも止められない。

「射精すると同時に、乳首でイクように命令出してやるからな……くううっ!!」

「やだやだやだああっ!!! そ、そんなイキ方したくないよおおっつ! んやつ、あはあああっつ!!」

にゅばんつ、にゅばんつと真ん中のチンポを圧迫してしごく90cmの姫騎士巨乳。

風呂場の熱でうつつすら上気し、黒髪が何筋か貼付いた顔を狙う、ぎちぎちの赤黒い亀頭。

俺は腰の奥で荒れ狂うオスの衝動を解き放つと同時に。

きゆううううっ!! と、充血した乳首を指先でつねり上げて命令を放った。

「ううっ、イクぞつ、顔面にご主人様のマーキングだつ!! 精液ぶっかけられて、乳搾りでイッてしまえ、姫野キリカあつ!!」

「やつやだつあつあつあつ………ひぐうううあああ~~~~~つつつつ!!」

どびゆるっ、どぶっどびゆるるるううう!!!

のけぞって乳首絶頂したキリカの柔らかな巨乳に圧迫、いや圧搾され。

すさまじい勢いで肉棒の先から、ねばつく白濁液が姫騎士の顔面にぶちまけられた。

次々と、自分でも驚くほどの量が、整った美少女の顔を、黒髪を、汚していく。

「はうっ……はぶあっ?! あああっ……んはあ、やああ……っ!!」

「く、うくっ……!! う、おっ……ま、まだ出るっ! お前は俺のだっ、俺だけの魔隷だぞキリカ  
っ……ううっ!」

「や、やらああ……!! あ、あなたのにい、なんかああ……!!」

「身も心も俺のものになるまで、これから毎日、こうして刻み込んでやる……体の中に、外に、俺  
の所有物だっ証をな……!!」

ねっとりと臭く白いミルクが、魔力の媒体となつて新たな隷属の証を刻み込む。

荒い息を吐いて、乳首イキの余韻と汚された屈辱に身を震わせるキリカを見下ろしながら、俺は  
この上ない征服感に浸っていた。

そして……タイミングを見計らつたように。

湯気とイヤらしい匂いのたちこめる風呂場に、ふたつの人影が現れる。

「隷属術式の更新、ちゃんと終わったようですねっ、ご主人様!」

「あーあー、姫騎士サマつてば思いつきりカワイイ顔にひっかけられちゃつてまあ……出しすぎだ  
ぜ、マスターつてば!」

もやの向こうから現れる、金髪のセミロングと、ワイルドな長い赤毛。

「えっ、あ、あなたたちは……っ!!」

べつとりと顔に白濁を付着させたまま、違和感に混乱するキリカ。

無理もない。

女法術師ニーナと女戦士アメリア……俺の二人の魔隷。

だが、今の彼女たちは。

表情といい口調といい、今までの人形のようなそれではなく……まるで普通の人間のように、活き活きとしていたのだから。

ステータス	
【魔隷術師トオル】……………	ジョブ…魔隷術師LV7
	スキル…隷属魔法LV6
【姫騎士キリカ】……………	ジョブ…姫騎士LV5
	スキル…聖騎剣技LV3 / 魔法抵抗LV2

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル  
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、  
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**